＼合併号！／
11 2022 12 2022

ニジェール支所便り

支所長よりひとこと

最近のニアメは朝方18℃～日中30℃ぐらいの気温で推移しており、朝シャワーで少し肌寒く感じるぐらいで、なかなか快適である。NHK Worldニュースで日本の暴風雪、自動車立往生などを見ていると頑張れ日本と応援したくなる。ニジェールのテレビ天気予報はだいたい40秒ぐらいで終わってしまう。一年中ほぼそんな感じだ。

さて、2022年3月から11月にかけWHOニジェールと連携し、地方4州（ドッソ、タウア、マラディ、ザンデール）で母子健康改善・COVID-19等感染症対策のプロジェクトを実施した（写真はWHOから入手）。

ニジェールの妊産婦死亡は10万人当たり505人と非常に高く、住民のふたりに一人は保健センターから5km以上離れている。WHOはCOVID-19、マラリア、コレラ対策、ポリオワクチン接種などの支援に当たるため地方部に広いネットワークを持っている。プロジェクトでは4州の保健医療担当官計100人とRelais Communautaireと称する地元ボランティアのコミュニティ・ヘルス・ワーカー計350人へ能力強化研修を行い、続けて地元住民への啓発キャンペーンを行ってもらった。11万人を超える住民にリーチし周産期検診や栄養、手洗いの重要性等を伝えた。モロッコで普及した日本式母親学級の時もそうだったが、地元のおばさんワーカー達は実に話がうまく、まるで俳優のようだ。

ニジェールでは地方住民の健康管理に果たすRelais Communautaireの役割は非常に大きく、12月7日には「健康における地方開発の力強いテコ」と題する第1回全国大会も開催され、国土整備・コミュニティ開発大臣や人道活動大臣、UNICEF常駐代表の参列のもと全国25,300人の中から16人が表彰された。

写真:Actuniger

写真:Actuniger

ドッソ州のファルメイ保健区では、保健センターを出産可能な統合型センターに改修し、分娩台等の医療機材と救急車を供与。住民約1万人の医療サービス体制改善のお手伝いをした。

嬉しかったのは、改修した統合保健センターの隣に住民の皆さんが5百万FCFA（約110万円）を出し合って妊産婦診察室を併設し、今後、医療スタッフの宿直室と外周壁の建設も計画しているとのこと。

建物右側に診察室が建設されている

WHOニジェール事務所の常駐代表はカメルーン人のDr.アニヤ（赤い衣装）で、若いころJICA研修員として8か月間東京に滞在し母子保健を学んだ。今回ニアメの保健省で行った救急車と医療機材引渡し式前のマイナサラ保健大臣（黄緑衣装）との懇談では、「秋葉原でお土産を買いすぎて帰国する時大変だった」と楽しそうに話す。「その話はもう3回も聞いてますよ、アニヤさん！」

2021年は、IOMとの連携で国境管理体制強化のための国境警察への能力強化研修と地方治安機関と住民との信頼醸成活動（集会やサッカー大会など）を行ない、間接的に英国援助との協調にもなった。

これからも、治安上日本人の渡航制限の厳しい地方部への支援を実現するため様々な連携の可能性を探っていければと思っている。（ニジェール支所　小畑）

みんなの学校：コミュニティ協働による基礎教育の質及び男女間公平性の改善プロジェクト

基礎学力の向上や女子の就学･継続促進などに取り組んでいる「みんなの学校」第5フェーズも既に2年目。今日は、1年目に実施した活動の中から、マラディ州･ザンデール州の小学校約7,000校を対象に実施した基礎学力向上モデル（PMAQ-TaRL-SRP）の成果と今後についてご報告します。

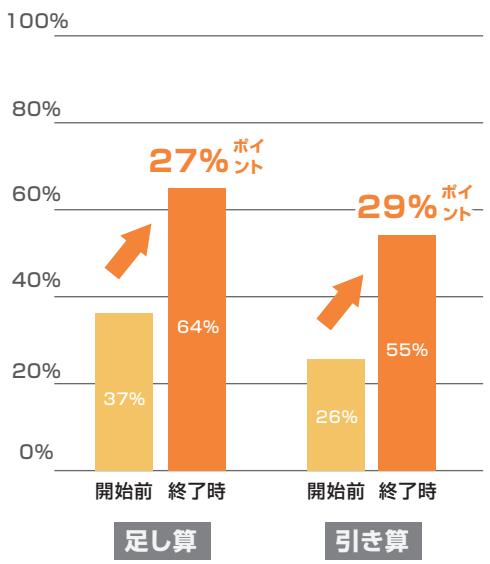
プロジェクトが実施したPMAQ-TaRL-SRPは、正規授業時間の一部と放課後に、フランス語の読みと算数についてたっぷりと補習を行うことで、子どもたちの基礎学力を向上させる取り組みです。低学年の時に習った基礎が理解できておらず、学年が上がり授業についていけなくなる児童が多いことから、2017/2018学年度から教育省では、新学年度開始直後の約3カ月弱は正規授業の多くを読みと算数の復習時間に充てるSRPと呼ばれる教育運営方針を実施してきました。PMAQ-TaRL-SRPでは、授業時間中の補習に加えて、放課後は地域ファシリテーターによる補習を実施することで更に児童の学習時間を確保します。また、児童の学年に関係なく、プロジェクトが作成した簡易テストの結果に応じて学力別にクラス分けし、補習を行います。更に、手作りのカードや棒を使ったり、遊びの要素を取り入れて楽しみながら補習を進めたりするTaRLと呼ばれる手法について先生方に研修を行い、補習の質も向上させるようデザインされています。

このモデルを信じて熱心に補習活動を実施した先生方、学校運営委員会の努力は、2021年10月中旬から12月中旬に実現した活動時間に現れています。各学校は平均で1教科あたり82時間の正規授業内補習と23時間の課外補習（合計105時間）を実現しました。
その結果、算数については、活動終了時には加減乗除のどれをとっても、計算ができる児童が活動前より少なくとも21%ポイントも増えました。この増加率も目を見張るものがありますが、足し算、引き算、掛け算については、できる生徒の割合が半数かそれ以上になったという点も大きな成果です。

四則計算ができる児童の割合の変遷

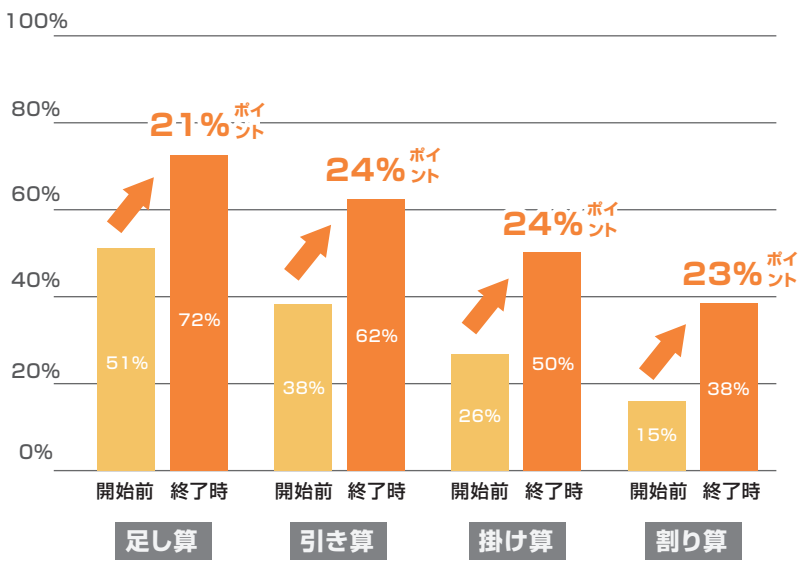
2年生

それぞれ27%ポイント以上の改善



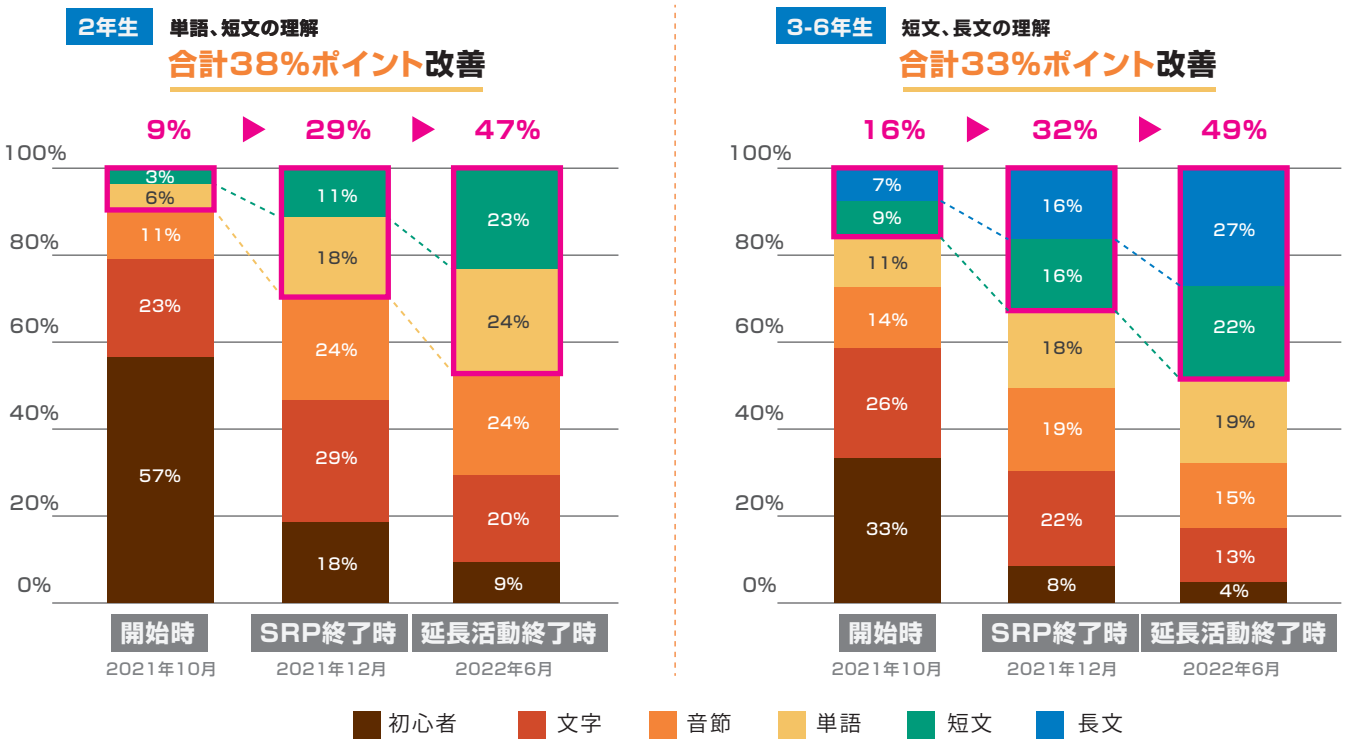
3-6年生

それぞれ21%ポイント以上の改善



読みについても能力は大きく改善しました。2021年12月中旬の段階で、単語以上が読める小学2年生は20%ポイント、短文以上が読める小学3〜6年生は16%ポイント増えたのです。しかし、大幅に増加したとはいえ、約7割の児童はまだ目標レベルに届いていなかったことから、ほとんどの学校運営委員会が読みについては2022年2月上旬から6月上旬まで課外補習を延長実施することを決めました。その結果、延長活動期間も合わせると、読みについては合計172時間（正規授業内82時間、課外補習90時間）の補習活動が実施されたのです。延長活動後には、単語以上が読める小学2年生が47%、短文以上が読める小学3〜6年生が49%と、ほぼ半数に迫るまでになりました。

読みができる児童の割合の変遷



ここまでの成果はなかなか得られるものではありません。この特筆すべき成果は2022年8月に教育省や援助機関関係者との経験共有会合でも報告し、教育省に対してはPMAQ-TaRL-SRPの全国普及に向けて援助機関からの資金獲得に取り組むことが提言されました。しかし、モデルの普及に向けた道のりに大きな困難が立ちはだかりました。2022年10月に突然、教育省からSRPを廃止する通知が出されたのです。素晴らしいモデルの普及基盤が失われる事態に危機感を抱き、プロジェクトでは教育省事務次官や教育大臣らの説得を重ねました。2022年12月に開催したプロジェクト合同調整委員会では、出席した各州の州教育事務所長からもPMAQ-TaRL-SRPモデルの成果を踏まえて、来学年度（2023/2024）からSRPを復活させてほしいとの声が上がり、教育省に対する提言に盛り込まれました。この提言を踏まえて、2022年12月20日に、PMAQ-TaRLのアプローチを用いて学年度始の補習活動を再構築するための技術的検討を行う委員会が設置され、第1回検討会が開催されたところです。プロジェクトは、同委員会における議論を建設的な方向に導くことによって、子どもたちの基礎学力向上に威力を発揮できる当モデルの復活に向けた道を、切り開いていきます。さらに、当モデル復活後、その普及のために、プロジェクトが技術的、資金的に最大限の支援ができるように、事務所と本部と相談していきたいと思います。

（みんなの学校プロジェクト　専門家一同）

ニジェールでゴミを集める日本人（第 38 回）

～ イスラームの心とわたしの親ゆび ～

支所便り2016年7月号から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一教授の「ニジェールでゴミを集める日本人」シリーズ第38話。今回はニジェールでの怪我のご経験について寄稿いただきました。

前回の支所便りでは、ニジェールの畑や緑化サイトに生育してくる植物には、クセの強い植物が多いことを紹介しました。するどいトゲのある植物、家畜が反芻して吐き出したり、胃を通過して排出したりすると発芽率の上がる植物、そして、ひっつき虫が衣服やズボンにひっついて種子が運搬される植物などが生育しています。サヘル地域でウシをはじめとする家畜が飼育されはじめたのは、すくなくとも4000年前です。それ以降、長きにわたり植物たちは家畜やそのほかの草食動物の食草に耐え、そして逆手に利用することで適応をみせてきたといえるでしょう。

そのなかでも、ハウサ語でカレンギアと呼ばれるイネ科の草本（Cenchrus biflorus）は小さな種子を囲む稃（もみがら）に硬毛が生えており、この硬毛はあちこちの方向に向かっていて、しかも簡単に抜けるので、ズボンにひっついた種子をとろうとすると、ズボンに種子がひっついたまま、指にトゲが刺さります。

ニアメ近辺の緑化サイト:クセの強い植物が多く生育します。

わたしは、この植物のトゲが親ゆびに刺さって、えらい目に遭いました。いまでも、右手の親ゆびには痛みが残っています。事の発端は昨年、2021年の10月のことです。コロナ禍のなか3か月の滞在予定でニジェールへ来て、ホテルでの隔離明け直後の出来事でした。わたしは環境・砂漠化対策省の局長や職員、JICAニジェール支所のアブドゥさんとともに緑化サイトへ行き、生育する植物を観察していました。大量のカレンギアのトゲがズボンにつき、わたしは注意することなくズボンのトゲを指で取っていました。何本かのトゲが指のひらに刺さり、今度は指のトゲをゆっくり注意深く抜きました。でも、右手の親ゆびのトゲだけがどうしても抜けません。ゆっくり皮膚のうえからさすると、チクチクと神経を刺激し、痛みがあります。

われわれは市内へ戻り、いつものように友人に依頼し、ひとりが縫い針をガスの炎で消毒し、トゲを抜いてくれました。しかし、翌日にも違和感が残っています。それで友人に縫い針で親ゆびをほじってもらいました。その友人は、トゲは残っていないというのです。そのあと、わたしはコロナ対策の手指消毒用アルコールで傷口を消毒しました。それは、わたしのあやまちだったのですが、手指消毒用のアルコールはジェル（ポリマー）を含んでおり、傷口の消毒に使用してはいけなかったのです。傷口はアルコールを吸い、親ゆびはパンパンに膨れました。過ちに気づくことなく、わたしはアルコール消毒と軟膏の塗布を繰り返しました。1週間、2週間、3週間、親ゆびは膿をもちはじめ、膨れ上がり、痛みは激しくなります。

包帯を巻いた右手の親ゆび:コロナ予防の
手指消毒用アルコールを使ってはいけません。

膿を持ち始めたことで、自己治療をやめて、市内の総合病院の外科に行きました。担当の外科医に処置室で待つよう指示され、夕方の薄暗い処置室で木製のイスに座り、ゴミ箱のなかの捨てられたガーゼと包帯をみつめながら、不安を感じながら待ちました。おもむろに外科医は処置室へやって来て、これから膿を出すといい、左手でわたしの右手をおさえつけ、右手に持ったメスで患部を切開し、ときおり消毒液をかけ、何度もなんども膿を絞り出しつづけました。指には神経が多く、麻酔のない切開の痛さは言葉にできません。

その後、帰国するまでの3週間ほど、患部を消毒するために通院をつづけましたが、その痛みは今、思い出すだけでも、全身が震えます。施術された指の包帯をみて、ニジェール支所のアブドゥさんは周囲の友人たちの顔を見ながら、「カチヤと同じだ。オーヤマさんも、ムスリムの男になったね」と笑いました。カチヤとはハウサ語で、割礼のことです。その痛さは、ニジェールの男性たちは皆、一生、忘れないと口々に語ります。

わたしは20年以上にわたってニジェールで調査をし、生活をしてきましたが、ムスリムではありません。友人たちが毎日、繰り返す礼拝に参加したこともありませんし、ちょっと離れたところから見ているだけです。ラマダーンの断食もしませんし、わたしは不謹慎にも友人たちに隠れて水を飲んだり、食事をとったりすることもあります。人々はイスラームの教えにしたがって断食をすることにより、食事のありがたさを知り、飢えや貧しさにあえぐ隣人たちの苦しさを知るのだと言います。わたしの友人やスタッフたちには富裕層と思える人はおらず、日々の生活に困窮する人も多いのですが、みなは毎年、断食を続けます。ただ、わたしも親ゆびの痛みを感じるたびに、飢えや貧しさ、そして人々の苦しさ、痛みを思い出し、やさしさが必要だということを知るのです。

消毒とガーゼの交換:患部が回復にむかうと、通院せず、
友人たちが毎日、消毒とガーゼを交換してくれました。

ニジェール文化紹介：KOKOWA、国の剣を決める戦い

写真:Actuniger / 試合中の様子

写真:Actuniger / 優勝したイサカ･イサカ選手

ニジェールの冬は熱い。なぜならば、伝統相撲の全国大会が開かれるからだ。この国で最もポピュラーであり、みんなが熱狂するスポーツである。世界は12月にワールドカップで盛り上がったが、この国の伝統相撲への熱狂ぶりはそれを上回るように思える。支所便り今月号では、この伝統相撲を大解剖するとともに今年の王者について触れたい。

伝統相撲はフランス語で「Lutte（リュット」、ハウサ語で「Kokowa（闘い）」と呼ばれ、優勝者は剣を授かることから「Sabre national（国の剣）」とも呼ばれる。1975年に当時のセイニ･クンチェ大統領が第一回大会を開催して以来、ほぼ毎年開催されている。もともとは村々で特別な行事や豊作を祝うための伝統的な戦いとして始まった。戦いは月明かりの下、村の若い女性や子供たちの喧騒とタムタムの音に包まれていた。大会が開催されることにより、ニジェール人自身がそれを追体験するとともに、「筋肉を使った戦い、勇気、勇敢さ」を呼び起こすものだ。

体格は日本のお相撲さんのようなものではなく、どちらかといえばレスリング選手に近い。ルールはいたってシンプル。頭、肩、ひじ、背中、お腹のいずれかが先に土についた方が負けだ。手が地面に付いたり、土俵から出たりしても負けにはならないが、相撲のような回しがないため、四肢を狙った取っ組み合いが行われる。選手は重心を前に落とし、頭をくっつけて駆け引きやフェイントの応酬となる。長い膠着状態の後、勝負は一瞬で決まる。

2022年12月、第43回全国大会がディファ州で幕を開けた。地方予選を勝ち上がり、ニジェール全8州の代表闘士10名ずつ合計80名が揃った。ラジオでは毎日中継が行われ、挨拶も昨日の試合を見た?から始まる。私は広島県出身だが、カープ戦翌日の県民との挨拶に近い印象を持つ。

2023年1月1日に決勝戦が行われた。優勝者は前回王者であり、言わずも知れた最強のグラディエーター、ドッソ州のイサカ･イサカ選手（闘士名）。決勝戦ではニアメ州のサボ･アブドゥライ選手と対戦。3ラウンド目にイサカ･イサカ選手が鮮やかにサボ選手の片足をさらった。私は国営テレビの生放送を見ていたが、ちょっとネコと遊んだ隙に勝負が決まった。ニジェール史上初の5回目のチャンピオン誕生の瞬間であった。

10日間の熱狂は終わり、首相からトロフィー、国章、賞金、豪華な馬具などが贈られた。その他の選手もフェアプレー賞、衣装賞などを様々な賞が授与された。ニジェールは多民族国家であり、住む地域によって民族が異なる。スポーツを通じて人と人の相互理解を深めることは、地域の平和と安定において非常に重要であり、今大会のテーマである「共に生きよう、みんな一つの家族！（"vivre ensemble, nous sommes tous une famille!"）」もそれを物語っている。　（ニジェール支所　山本）

OY の発見記：念願のニジェール瓶ビール

背景が気になる?私は一人暮らしです。

着任早々、前任者に「何か買いたいものある?」と聞かれ、開口一番「アフリカン瓶ビール」と答えた。イスラム圏であるニジェールではお酒を飲まないことを知っていたが、売っていることも知っていた。ただ、瓶ビールをケース買いできる店をなかなか見つけられない。基本、瓶ビールは空瓶との交換であるため、まずは空瓶もしくは瓶・ケースごと購入しなければならない。周りのニジェール人は酒を飲まないので、購入先情報も持っておらず、やっと見つけたニジェール缶ビールで凌いでいた。

前任者はそれでも瓶ビールケースを運ぶトラックを見つけては追いかけ、それを今売ってくれ!どこで買える?と声をかけてくれた。トラックはのろのろ走行しながらも今は売れない、ケースを持っているか?電力会社近くでまずはケースと瓶を買え!との情報と苦笑しながらも伝票を見せてくれ、価格まで教えてくれた。ただ、電力会社近くでも店舗は見つけられず、ニジェール缶ビールの日々が続いた。ちなみに前任者は酒を飲まない。つまりは皆、私のわがままに付き合ってくれているのだ。

それが、先日、偶然にも電力会社の近くで瓶ビールをケースで売っている店を見つけた。しかも種類が豊富。迷わずニジェール瓶ビールを注文。

私「ところで、このニジェールビールはニジェールで作られている?」

店主「Non」

私「では、ニジェールで充填しているとか?」

店主「Non、いろいろな国で作ったものを持ってきている」

私「ん?んじゃ、なぜニジェールビールと呼ぶ?」

店主「ニジェールで売っているから」

私「んじゃ、私がニジェールのおいしい玉ねぎを日本で売れば日本の玉ねぎと言えるんだぁ!」

と揚げ足取りの会話に店主は苦笑。私は一瞬“勝った”気分になったが、自分はなんて小さな人間なんだと反省した。思えば、苦笑するニジェール人の顔をよく見る。これは彼らの寛大さの表れだろう。多分、これからも彼らのこの懐の深さに甘えて生活していくのだと思う。（ニジェール支所　大弥）

※ 現在、ニジェール瓶ビールはニジェールで生産されているようです。